

【53】 街を散歩して不安になる

私、皇居のお堀の近くの（旧）関東地方建設局や桜田門近くの国土交通省に勤務していて土地勘もあったことから、東京でも指折りの景色の良い皇居のまわりをたまに歩くのを楽しみにしています。

ところが、この頃は楽しいはずの散歩で心が休まらず、かえって不安になるのです。

それは別に治安が悪いとか、足元がおぼつかないとかではなく、見慣れたはずの街の景観の急速な変化、悪くいえば悪化です。

戦後の経済発展期と引き続くバブル時代に建てられた十数階建、50m前後の高層ビルが、次から次へと30～40階建、高さ100m以上の超高層ビルに建て替っていくのです。

丸の内、大手町あたりは今やニューヨークのマンハッタンの中心街のような観を呈し、開けた空間というと、東京駅広場と内堀通り、日比谷通りなどのメインストリートくらいです。

バブル期のビルは、金に糸目をつけなかったせいも、ビルの周辺に植込み用の空地や建築基準法による公開空地などのオープンスペースがとってありましたが、この頃のビルは、建蔽率一杯の大げさに云えば敷地そのものが、そのまま背の高い見上げるような長方形の箱になったようなものです。

春になると、大手町の内堀通りに面したビルの樹木に囲まれた池から、一個分隊のカルガモの親子が、通りを渡って反対側の皇居のお堀へ移動するのを、多忙なビジネス街の車の流れを停めて、皆で温かく見守ったなんて話は文字通りの昔話になってしまいました。

又、ビル街の一隅には、狭いながらも何本かの高木に囲まれてヒンヤリした空間に“平将門”の墓があって、周囲のビルの執務室で背を向けて座るとタタリがあると脅かされていたのですが、建替え後の超高層化したビルの傍らでは、今では墓地も樹木は取り払われ石張りの明るいサッパリした広場と化していまい、怨霊が出るどころの話ではありません。

皇居の堀沿いの三宅坂に、正倉院の校倉造りを模したという棟高が低い落ち着いた雰囲気国立劇場も、ホテルを含む超高層ビルに建替るという計画で、劇場は閉鎖されたままもう一年以上が経っています。

国会議事堂前の憲政記念館の背後の樹林も取り払われ、現在、国立公文書館の新築中です。はたして何階建てのビルになるのやら心配です。

少し皇居から離れた公園緑地の明治神宮外苑では、野球場やラグビー場の運動施設の改築に合わせ、樹木を千本も伐採してホテルなど超高層ビルを建てるという再開発事業が進行中で、反対の声が高まっています。

その近くの青山一丁目の交差点角にあるホンダの16階建ての本社ビルも築わずか40年にして建替えられるとのことでした。

ホンダ社長の本田宗一郎氏が自ら力を入れて建てたという、最新の情報設備を備えた“インテリジェントビル”は名声があり、私も（旧）建設省からの視察班に加わって見学しました。1985年のことです。

職員が皆、磁気カードの職員証を持たされ、玄関はもちろん部屋から、トイレは聞きもらしましたが喫

茶室までそのカードをタッチして出入りするの、鉄腕アトムの未来都市ってこんなのかなと大いに感心したものでした。

建物も自動車メーカーということから、車の展示コーナーとして広く空地がとってあり、ビル自体のデザインも周辺環境を考慮して白い躯体で大変感じが良かったのです。

ゆとりあるレイアウトに、建蔽率と容積率に余裕がありすぎて、現代のせちがらい時代には放っておけないのですね。

美しいもの、ゆとりのあるもの、風格のあるものが次々と姿を消し、何の特色も無いただ背の高い箱ビルに変化していくのを見ていると、散歩していて心配になり不安になるのです。